

『スクリーンミュージックで学ぶ英語』の手
応え

Hiranoi, Chieko / 平野井, ちえ子

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

1

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

97

(終了ページ / End Page)

103

(発行年 / Year)

2000-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004554>

『スクリーンミュージックで学ぶ英語』の手応え

平野井 ちえ子

はじめに

映画で英語を学ぶというアイデアは、決して新しいものではなく、シナリオをテキストの体裁に作って出版した例は、筆者が大学で英語を教え始めた10年前からたくさんあった。大きく分けると、一つの映画にしばったものと複数の映画の見所を抜粋したもの、のどちらかになるわけだが、いずれのタイプについても言えることは、一冊で扱っている分量が多すぎるということと、ときには教員でさえ何度も聴き返さなければわからないようなわかりづらい英語のセリフが学習対象になっていることが多い、ということである。とくに、一つの映画にしばったテキストの場合、その映画が学習者にとって興味のもてるものでなかったら、悲惨である。学生が英語に興味をもてるように意図したつもりが、「なんだ、やっぱり先生の趣味を押しつけられるんじゃないか」という、被抑圧者の憂鬱を生んでしまう。しかも、その映画の英語が聴き取りづらいものであったりすると、「映画を使ったって、やっぱり英語はわからない」という絶望と欲求不満の原因となる。

その点、『スクリーンミュージックで学ぶ英語』（金星堂）は、使いやすかった。もともとリーディング授業のリフレッシュを目的として作られているため、一冊の分量が少ない。筆者にとって、「分量が少ない」ことは、テキストを選ぶ際の決め手の一つとなっている。無論テキストは、受講する学生の属性から、英語のレベルとトピックの種類を想定して決めるのだが、どんなに慎重に選んだつもりでも、何十人ものクラス全員が満足ということはあり得ない。したがって、メインテキストは薄く、受講者の反応に合わせて敷衍しやすいものを選ぶことにしている。ときどきジャーナルライティングを実施して、授業のどこかで、全員のリアクションが生かせるように工夫することが必要

である。

このテキストが扱っているのは、主として「懐かしの名画」のテーマソングで、比較的平易で標準的な英語のスローなバラードが多い。全15課は、次のような内容になっている。

- Chapter 1: 'Over the Rainbow' from *The Wizard of Oz*
- Chapter 2: 'When You Wish upon a Star' from *Pinocchio*
- Chapter 3: 'Love Is a Many-Splendored Thing' from *Love Is a Many-Splendored Thing*
- Chapter 4: 'More' from *Mondo Cane*
- Chapter 5: 'Moon River' from *Breakfast at Tiffany's*
- Chapter 6: 'Maria' from *West Side Story*
- Chapter 7: 'Days of Wine and Roses' from *Days of Wine and Roses*
- Chapter 8: 'Charade' from *Charade*
- Chapter 9: 'The Shadow of Your Smile' from *The Sandpiper*
- Chapter 10: 'A Man and a Woman' from *Un Homme et une Femme*
- Chapter 11: 'Raindrops Keep Fallin' on My Head' from *Butch Cassidy and the Sundance Kid*
- Chapter 12: 'Where Do I Begin' from *Love Story*
- Chapter 13: 'Cabaret' from *Cabaret*
- Chapter 14: 'Speak Softly Love' from *The Godfather*
- Chapter 15: 'Evergreen' from *A Star Is Born*

強いて難を言えば、古い映画ばかりで、いまどき

の一般学生にはあまり馴染みの無いものが多いということだが、歌詞の聴き取りやすさを重視すると、どうしても年代が遡る傾向は否定できない。

各課の構成は、一課あたり3ページで、最初に4～5行の日本語で映画の紹介が書かれていて、その後4つのアクティビティが用意されている。一つ目は、付属のCDで歌を聴き、歌詞の一部を書き取ったり、与えられた単語を並べ替えたりする練習になっている。2つめは、歌詞に登場する発音と文法の練習。3つめは、リスニングとリーディングの融合問題で、歌詞について英語で書かれたパッセージかダイアログを読み、テープの英問に選択肢で答えるもの。4つめは、歌詞の内容に対する理解を深めるためのディスカッション・トピックである。

本稿では、このうち筆者が本学通信教育部のスクーリング授業で扱ってとくに手応えのあった4つの映画をとりあげ、紹介のしかたと受講者の反応をまとめるものとする。

1. *Pinocchio*

現在も絶大な人気を誇るディズニーアニメの第2作目で、'When You Wish upon a Star' 自体、知らない人のない有名なテーマである。こういう有名な物語を教材に選ぶ場合、導入としてみんなで楽しめるアクティビティがある。クラスを4～5人ずつの小グループに分け、これがどんなお話であったかを、発表し合うというものである。学生の英語力に応じて、日本語でやってもかまわない。子供のころに親しんだ物語は、知っているつもりで、意外と忘れていたり、ほかの話と混同していたりする。突拍子もない番外編が登場して、クラスのムードがほぐれる可能性もあるので、学期初めに試すのが有効である。エクステンション・カレッジや通信教育部のスクーリングなどの、受講生に世代差のあるクラスでも、共通の話題として位置づけられるので、世代間交流に役立つ。

筆者は、授業でこのテキストを使用するにあたって、各課のはじめに、それぞれの映画の一部を抜粋して紹介することにした。*Pinocchio*では、ゼペットおじいさんの工房に入り込んだジミニ・クリケットが、青い妖精から、ピノキオの「良心」となり正しい行いに導く役割を命じられるところ

までを、紹介した。これは、オープニングから4～5分で始まるシーンで、ゼペットおじいさんが木彫りの操り人形のピノキオを仕上げ、これが本当の人間の男の子だったらいいのに、と星に願いをかける物語の発端である。工房には、おじいさんが作ったたくさんの木彫り細工の時計やオルゴールやおもちゃがあり、いかにもウォルト・ディズニーらしい夢のあるロマンチックな描写になっている。猫のフィガロや金魚のクレオも愛らしい。皆が眠りにつくと、青い妖精が現れて、ピノキオに生命を吹き込み、本当の男の子になっておじいさんの願いを叶えなかったら、正しい行いを学ばなければいけない、と試練を言い渡す。青い妖精が去っていくのが、オープニングから20分弱のところである。映画全編が88分で、そのうちの15～6分を費やした贅沢な発端で、言葉では語りきれないディズニー映画の楽しさがふんだんに盛り込まれている。授業のあとで自分でビデオを最後まで見たい、と思わせるのには十分の場面である。筆者が担当した通信教育部の授業では、「これをやった日に、すぐ、娘とビデオを借りに行き、2人で一気に見てしまいました」というお母さん受講者のコメントがあったり、男性の受講者まで顔をほころばせて画面に熱中しているのを目のあたりにして、手応えを感じることができた。

日本人大学生に英語を教える場合の難しさに、英語力と知的内容のバランスの問題がある。平易な英語で内容のある教材を探すのは難しい。その点、紹介した15～6分のシーンのうち、「青い妖精」の台詞は、秀逸である。以下にその部分のスク립トを掲載する。

Jiminy Cricket : Now, what's up?...Hey, what's going on here?

As I live and breathe, a fairy!
Mmmmm!

The Blue Fairy : Good Geppetto, you have given so much happiness to others. You deserve to have your wish come true. Little puppet made of pine, wake! The gift of life is thine.

Jiminy Cricket : Whew! What they can't do these days!

Pinocchio : I can move! I can talk! I can walk!
The Blue Fairy : Yes, Pinocchio, I've given you life.
Pinocchio : Why?
The Blue Fairy : Because tonight, Geppetto wished for a real boy.
Pinocchio : Am I a real boy?
The Blue Fairy : No, Pinocchio. To make Geppetto's wish come true will be entirely up to you.
Pinocchio : Up to me?
The Blue Fairy : Prove yourself brave, truthful and unselfish, and someday you will be a real boy.
Pinocchio : A real boy!
Jiminy Cricket : That won't be easy.
The Blue Fairy : You must learn to choose between right and wrong.
Pinocchio : Right and wrong? But how will I know?
Jiminy Cricket : How will he know?
The Blue Fairy : Your conscience will tell you.
Pinocchio : What are conscience?
Jiminy Cricket : What are conscience! I'll tell ya! A conscience is that still small voice that people won't listen to. That's just the trouble with the world today, you see?
Pinocchio : Are you my conscience?
Jiminy Cricket : Who, me?
The Blue Fairy : Would you like to be Pinocchio's conscience?
Jiminy Cricket : Well, w-, uh, I-, I-, uh-, Ohh. Uh-huh.
The Blue Fairy : Very well. What is your name?
Jiminy Cricket : Uh, oh, uh, cricket's the name.
Jiminy Cricket :
The Blue Fairy : Kneel, Mr. Cricket.
Jiminy Cricket : Huh? No tricks now.
The Blue Fairy : I dub you Pinocchio's conscience, lord high keeper of the knowledge of right and wrong, counselor in moments of temptation

and guide along the straight and narrow path.... Arise, Sir Jiminy Cricket.

Jiminy Cricket : Well! Oh-ho-ho! My, my! Mmm. Say. That's pretty swell! Gee...thanks! But, uh, don't I get a badge or something?
The Blue Fairy : Well, we'll see.
Jiminy Cricket : You mean maybe I will?
The Blue Fairy : I shouldn't wonder.
Jiminy Cricket : Make it a gold one?
The Blue Fairy : Maybe. Now, remember, Pinocchio, be a good boy. And always let your conscience be your guide.
Jiminy Cricket : Good-bye, milady.
Pinocchio : Good-bye!

ここでは、「青い妖精」がピノキオに教え諭すように語りかけ、ピノキオが妖精の台詞の一部を反復しているし、'conscience'というキーワードが何度も繰り返されているので、リスニングの教材として取り組みやすいくだりになっている。初歩的なクラスでは、ピノキオが反復している台詞を書き取るアクティビティができるし、リスニングに少し慣れたクラスなら、このダイアログを聴いて、'conscience'とは何か、英語でまとめるというアクティビティも可能である。

2. *Breakfast at Tiffany's*

言うまでもなく、原作は、トルーマン・カポーティによる同名の中編小説であるが、大方の学生にとっては、あくまでオードリー・ヘップバーンの「ティファニーで朝食を」であり、ヘンリー・マンシーニの主題歌とジバンシーのファッションが、ヒロインをより魅力的に演出している。気に入った映画を答えるアンケートでこれを選んだ人が、ほとんど、同テキストにも入っている「シャレード」かデビュー作の「ローマの休日」に言及していることから、ヘップバーン人気の根強さが窺える。ただ、もし、ある程度まとまった時間をこの作品に充てることのできるなら、原作と映画との違いを学生にレポートさせるのも有効であ

る。ピノキオの物語と同じように、グループ作業で取り組ませれば、わいわい言いながら、気楽に意見交換できる。原作をグループの数に分け、映画の描写と異なる印象を与えるところを、英語のままレポートさせるとよい。そうすれば、いくら翻訳が簡単に手に入っても、少しは原文に触れることになる。逆に、映画の中の特定の台詞が、原作のどのくんだりから作られたか、を考えさせるのもいい。いずれの場合も、英文に触れるという効果だけでなく、脚色の苦勞と楽しさを垣間見ることができる。押しつけがましい講義をせず、学生の責任感と協調性に委ねた方が、はるかに刺激的な作業になる。

この映画の導入に筆者が選んだのは、まさにジバンシーのイブニングドレスに身を包んだヒロインがティファニーのショー・ウィンドーの前で朝食をとっている冒頭のシーンから、売れない作家のポールのパトロンの有閑マダムが登場するところまでである。オープニングからここまでが約15分で、ホリー・ゴライトリーの謎の生活を垣間見せながら、ポールと彼女の交流の発端を作ってもいる。また、このくだりにミスター・ユニオンという変な日本人も出てきて、ハリウッド映画における日本人のステレオタイプの一例として紹介することもできた。すでに自分でこの映画を見た学生も少なくなく、ヘップバーンが窓辺でギターを弾きながら、「ムーン・リバー」を歌っている場面が好きだ、というコメントもあったが、筆者としては、せつかくの文学作品の映画化なので、ある程度ストーリー性のある部分を選びたかったのだ。

3. *West Side Story*

ミュージカル映画として名高い『ウエストサイド物語』は、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』をモチーフに、舞台を1950年代後半のニューヨークに置き換え、モンタギューとキャピュレットというヴェローナの名家の抗争を、マンハッタンのスラムの不良グループ、イタリア系やポーランド系のジェット団とプエルトリコ系のシャーク団の抗争に変えている。ロミオとジュリエットに該当するのは、ジェット団の先輩格のトニーとシャーク団のリーダー、ベルナルドの妹マリアである。

テキストで取り上げている「マリア」は、二人が始めて出会ったダンス・パーティーの後、トニーがマリアを想って歌う曲である。平易な英語で繰り返しが多いのでテキストに採用されたのだろうが、『ウエストサイド物語』は、名ナンバーの連続で、どのナンバーを教材に選ぶかで、それぞれの教員の個性が表れて面白いところである。「マリア」のほか、マリアの住むアパートの非常階段で2人がデュエットで歌う「トゥナイト」、シャーク団の男女が新天地アメリカに対する夢と挫折をダイナミックなダンスに乗せて歌い上げる「アメリカ」、リーダーのリフを失ったジェット団が激しい不安と憤りを押さえて生き抜く決意を表明する「クール」などがある。

『ウエストサイド物語』から、筆者は2つのシーンを選んだ。1つは、トニーとマリアが出会って恋に落ちるシーン、次は、「アメリカ」が歌われるシーンである。前者は、『ロミオとジュリエット』には無くてはならない出会いのシーンで、後者は、『ウエストサイド物語』ならではのテーマ、「人種差別」と「移民問題」を正面に打ち出したナンバーである。英文科の授業でもなければ、あえてシェイクスピアの原作までさかのぼる必要も無いが、前者については、ほかの『ロミオとジュリエット』の映画化と比較してみるのも面白い。特に、『ウエストサイド物語』から7年後の1968年に制作された、フランコ・ゼフィレリ監督の『ロミオとジュリエット』の出会いのシーンは、「愛はつかの間の炎」で始まるニーノ・ロータの名曲にのせた、全編中もっともロマンチックなシーンである。15歳のオリビア・ハッセーの色気とあだけなさが画面いっぱい広がって、筆者が別のシェイクスピアの授業でこれを紹介したときには、ほとんどの学生が画面にくぎづけになり、「かわいい、かわいい、」を連発していた。(今どきの若い学生は、オリビア・ハッセーという女優を知らない。したがって、「オリビア・フセ」という下手な洒落も通じない。)『ウエストサイド物語』では、ジェット団とシャーク団が競い合うアクロバティックなダンスシーンと、周囲の喧燥から1歩引いた位置で惹かれ合っていくトニーとマリアの、動と静のコントラストが特徴的である。後者の「アメリカ」は、このミュージカルのドラマツルギーである「人種差

別／移民問題」と密接なつながりを持ち、プエルトリコ移民のアメリカ社会への愛憎を、女性が肯定側、男性が反発側に別れて、歌と踊りで対決する形を取っている。次は、その部分のスク립トである。こういうナンバーを紹介すると、ミュージカルに偏見をもっている人の見方も変わるかもしれない。

Anita : Puerto Rico

My heart's devotion

Let it sink back in the ocean

Always the hurricanes blowing

Always the population growing

And the money owing

And the sunlight streaming

And the natives steaming

I like the island Manhattan.

Consuelo : I know you do!

Anita : Smoke on your pipe and put that in.

Everyone : Ole!

Girls : I like to be in America!

Okay by me in America

Everything free in America.

Bernardo : For a small fee in America.

Anita : Buying on credit is so nice.

Bernardo : One look at us and they charge twice.

Consuelo : I'll have my own washing machine.

Chino : What will you have, though, to keep clean.

Anita : Skyscrapers bloom in America.

Girl #1 : Cadillacs zoom in America.

Girl #2 : Industry boom in America.

Boys : Twelve in a room in America.

Anita : Lots of new housing with more space.

Bernardo : Lots of doors slamming in our face.

Anita : I'll get a terrace apartment.

Bernardo : Better get rid of your accent.

Anita : Life can be bright in America.

Boys : If you can fight in America.

Girls : Life is all right in America.

Boys : If you're all white in America.

Everyone : Ole!

Boys : La la la la la America America

La la la la la America America.

Anita & Consuelo : Here you are free and you have pride.

Boys : Long as you stay on your own side.

Anita & Consuelo : Free to be anything you choose.

Boys : Free to wait tables and shine shoes.

Bernardo : Everywhere crime in America.

Anita : Ha!

Bernardo : Organized crime in America.

Anita : Ha!

Bernardo : Terrible time in America.

Anita : You forget I'm in America.

Girls : Oooh!

Girls : Ah! Ah! Ah!

Bernardo : I think I go back to San Juan.

Anita : I know a boat you can get on.

Girls : Bye-bye!

Bernardo : Ha! Ha! Everyone there will give big cheer.

Anita : Everyone there will have moved here.

All : Oooh!

Girls : Aow! Aow! Aow! Aow! Aow! Aow! Aow!
Aow! Aaaaaaow!

All : Ole!

4. *Butch Cassidy and the Sundance Kid*

「雨に濡れても」は、「ピノキオ」の「星に願いを」と並んで受講者に人気の高かった曲だ。このテキストに取り上げられた曲の多くは、ラヴ・バラードで、あまり真面目にテキストに沿ってやっていると、マンネリ化しかねない。学生のコメントの中に、「あまりにダイレクトに恋愛を歌ったものが多く、恥ずかしかった」という意見もあり、深刻ぶらない軽快な曲調が、このテキストの中では新鮮に感じられたのだろう。

『明日に向かって撃て』は、実在した銀行・列車強盗を描いた西部劇の傑作とされている。筆者がこの映画の紹介に選んだのは、サンダンスの恋人、エッタ・プレースが登場する場面である。オープニングから約23分のところで、清楚な身なりの20代後半くらいの女性が帰宅し、家に灯をと

して、着替えを始める。下着姿になったところで、真っ暗だった部屋の奥に、男が座っているのを見つけてぎくっとする。男は銃で脅しながら、すべて脱ぐよう命令する。はじめから映画を見ていれば、この男がサンダンスであることはわかっているのだが、逆にこの段階では、服を脱いでいる美女の素性がわからない。彼女が全裸になる寸前に、サンダンスが近づいていくと、彼女の方から彼にしがみつく。初めてこの映画を見た学生は、4分間後のこのオチにぼっとしていた。この後B. J. トーマスが歌う「雨に濡れても」にのせて、サンダンスの相棒ブッチとエッタが当時新しかった自転車に相乗りして遊ぶ場面が続く。エッタはブッチに聞く。「あなたと先に会っていたら、私に恋した？」ブッチは答える。「今でも離れられない仲さ。俺の自転車に乗ったら、結婚したも同じなんだ。」エッタの登場から9分間であるが、3人の人物像が印象づけられ、サスペンスあり、ロマンスあり、ユーモアあり、の大変おいしい場面である。しかも、テーマソングまで入っているのだから、言うことが無い。

どちらかという、「星に願いを」は、ディズニーの人気アニメの主題歌だから受けた、という感じで、この「雨に濡れても」は、曲そのものの魅力で、気に入っている学生が多かった。「ビデオを借りてこのシーンを何十回も見ました」と答えた学生もいた。次の軽快な歌詞に、快活だったと言われるブッチの人柄と、彼のエッタへの想いが込められているのかもしれない。

Raindrops keep fallin' on my head
 And just like the guy whose
 Feet are too big for his bed
 Nothin' seems to fit
 Those raindrops keep fallin' on my head
 They keep fallin' so I just
 Did me some talkin' to the sun
 And I said I didn' t like
 The way he got things done
 Sleepin' on the job
 Those raindrops keep falling on my head
 They keep fallin'
 But there's one thing I know

The blues they send to meet me
 Won't defeat me
 It won't be long till
 Happiness steps up to greet me
 *Raindrops keep fallin' on my head
 But that doesn't mean
 My eyes will soon be turnin' red
 Cryin's not for me 'cause I'm
 Never gonna stop the rain by complainin'
 Because I'm free

Nothin' s worryin' me
 It won't be long till
 Happiness steps up to greet me

*Repeat

なお、はじめから見せるわけにはいかない場面だが、手負いの二人が敵に向かって飛び出していくラストも印象的だ。飛び出した二人の姿がそのままスチールになり、音だけが、ボリビアの軍隊が二人に一斉射撃を加えることを告げる。この二人でボニーとクライドのラストを見せられなくてよかった。そう思わせる人物描写だった。二人が死ぬところは見ませんからね」と言ったエッタの気持ちが反映したようなシーンだった。

最後に

筆者がこのテキストを使用した通信教育部のクラスでは、20歳から60代後半までの受講者が参加していた。英語力にも大きな開きがある。しかもスクーリングでクラス授業が受けられるのは限られた時間数である。年配の受講者や、英語が苦手な受講者が、肩身を狭くして、ひたすら時間が過ぎるのを待たねばならないような授業だけはしたくなかった。郵便の往復では絶対に体験できない、活発にクラスメートとコミュニケーションがとれるような授業にしたかった。その意味でも『スクリーンミュージックで学ぶ英語』はよかった。年配の受講者が、『世界残酷物語』をロードショーで見たときの印象や、ヘップバーンのファッションが公開当時の日本の女性たちに与えた影響など、筆者には提供できないコメントを発言してくれて、

勉強になった。それに、英語にもテキストで扱っている映画にも予備知識がない人でも、授業中に紹介された映画の断片の印象を活発に語ってくれて、素朴な感想を交換し合う楽しさも経験できた。発言がすべて評価の対象になると思い込んだら、クラス授業はつまらない。完成した発言を期待するなら、郵便でも事足りる。ブレイン・ストーミングのような、考えるためのコミュニケーションの訓練を、学校授業は目指すべきである。

最後になりましたが、法政大学通信教育部において1999年度の筆者のスクーリング授業に参加し活発なコメントを残してくれた受講生の皆さんに、深く感謝いたします。

本稿に関連のテキストと映画

- 前川利広・Craig Dermer 【スクリーンミュージックで学ぶ英語】 金星堂 1999年発行
ベン・シャープスティン監督 【ピノキオ】 1940年製作
ブレイク・エドワーズ監督 【ティファニーで朝食を】 1961年製作
ロバート・ワイズ監督 【ウエストサイド物語】 1961年製作
ジョージ・ロイ・ヒル監督 【明日に向かって撃て！】 1969年製作